

特集 共に生きる社会へ

■問い合わせ…障がい福祉課☎0197-72-8216

障がいのある人もない人も、互いを尊重し、分け隔てられることなく暮らせる「共生社会」の実現に向けて、地域全体での取り組みが欠かせません。今回の特集では、誰もが暮らしやすい社会を考えます。

12月3日～9日は障害者週間

日本では、約1153万人が何らかの障がいとともに生活しています。これは、国民のおよそ11人に1人です。障がいのある人は、決して遠い存在ではなく、あなたの身近にいます。

この週間は、障がいのある人への理解を深め、誰もが暮らしやすい社会を考える大切な機会です。

障がいは、一つじゃない

障がいにはさまざまな種類があります。大きく分けると、見た目で分かる障がいと見て分からない障がいがあります。具体的には身体障がい、知的障がい、精神障がい、発達障がい、高次脳機能障がいなど、障がいの種類は多岐にわたります。また、難病を抱えている人もいます。そして、同じ種類の障がいであっても、日常生活で不便さを感じる理由は人によって異なります。

障がいの種類はさまざま

障がいを正しく理解することは、誰もが安心して暮らせる社会への第一歩です。

身体障がい
視覚、聴覚、手足の不自由さ（肢体不自由）、内部機能（心臓、腎臓、直腸など）に障がいがあるなど、身体の機能に関わるものです。

知的障がい
物事を理解したり、判断したりする力に困難がある状態で、日常生活や社会生活に支障があるために、何らかの援助を必要とします。

精神障がい
統合失調症やうつ病など、脳の機能に支障が生じることで、気分や思考、行動に影響が出て、日常生活が困難になっている状態です。

発達障がい
生まれつき脳の発達に特性があり、コミュニケーションや学習、行動面で困難が生じます。

高次脳機能障がい
病気や事故などにより、脳が部分的に損傷を受けることで認知機能に支障が生じ、日常生活や社会生活が困難になります。

障がいのある人もない人も、共に生きる社会へ

障がいのある人もない人も共に生きるには、どのような社会が必要でしょうか。それは、障がいの有無や年齢、性別、国籍などに関わらず、全ての人が互いを尊重し、分け隔てられることなく暮らせる社会です。これを「共生社会」と呼びます。

共生社会の実現に向けて、障がいのある人も「暮らしやすい」と感じる社会をつくるには、地域全体の取り組みが欠かせません。市内では市民や企業など、さまざまな主体が共に生きる社会の取り組みを進めています。具体的な事例を通して、共生社会の実現を一緒に考えてみましょう。

共に働く

障がいのある人を雇用している企業、障がいのある人のインタビューから「共に働く」ことを考えます。

さまざまな場面で活躍していただいている



西部開発農産 代表取締役社長
照井 勝也（かつや） さん

農業、農産加工製造をしている西部開発農産は、30年ほど前から障がいのある人の雇用を始め、現在2人を雇用しています。

代表取締役社長の照井さんは「障がいのある人の雇用で心がけていることは、社員が障がいのある人の特性を理解してサポートしていること」と話します。作業の際は必ず班を組み、全員で協力しながら仕事を進めています。農業分野も機械化が進んでいますが、人の手が欠かせません。4月に採用された及川さんは、荷受けや出荷の補助などを担当し、現場で活躍。車の免許取得への意欲があり、会社としては将来的なフォークリフトの資格取得にも期待を寄せています。

障がいのある人が仲間に入ったことで、社員たちが自然と「どうすれば一緒に働けるか」を考えるようになりました。また、休憩時間も含めて自然とコミュニケーションが生まれ関係が深まり、職場全体の成長を実感しています。

障がいのある人を雇用することに対しては「ハードルは低いと感じている。会社に過度な負担にならず雇用できると思う」と、理解が広がることを願っています。

できることが増えてうれしい



従業員　及川さん（生産部）

――仕事の内容は

飼料米の荷受け、水分計測、出荷の補助などです。

――仕事でのやりがいを感じるときは

目標を達成したときです。

――うれしかったことは

最初はできなかった仕事が、何度かやっているうちにできるようになったことです。

――仕事を始めてから生活の変化は

規則正しい生活になりました。

――チャレンジしたいことは

車の免許を取りたいです。

社員のお手本であり、彼がいるから職場が明るくなる



かぎや菓子舗
代表取締役社長
阿部 龍太（りゅうた） さん
代表取締役会長
阿部 大司（だいじ） さん

菓子製造を手がけるかぎや菓子舗は、30年以上前から高橋修さんを雇用しています。高橋さんは入社以来、無遅刻無欠勤。家族のサポートも受けながら勤務しています。

代表取締役会長の阿部大司さんは「障がいがあることで難しい仕事もあるが、それを我々が理解し、指示の仕方を気を付けている」と取り組みを語ります。高橋さんは、菓子の袋詰めや材料の計測などを担当しています。苦手な仕事はサポートしたり、ホワイトボードにその日に行う仕事を書き入れたり、高橋さんが働きやすいように工夫。菓子の袋詰めは社員で一番早くできます。担当する仕事をしっかりとこなすことから「会社としては安心して仕事を任せることができ、戦力になっている。他の社員からも頼りにされている」と評価します。

朝は必ず社員全員に大きな声であいさつする高橋さんは、他の社員の模範となっています。「彼が話をすると、周りが二コニコする。ムードメーカーで、お互いに楽しく仕事ができる」と、会社にはなくてはならない存在になっています。

仕事が楽しい



従業員
高橋 修（おさむ） さん

――仕事の内容は

お菓子の袋詰めです。どら焼き、まんじゅうを入れています。

――仕事は何時から何時までですか

勤務は朝6時30分から、午前中で終わります。

――仕事には何で来ていますか

自転車です。

――クッキーの焦げを見つけるのが得意と聞きました

何回も見つけています。

――スポーツ大会の陸上競技でメダルを取ったそうですが、走るのは好きですか

好きです。

きりこかみ

共に生きる

障がいのある人も障がいのない人も、同じ地域の仲間として「共に生きる」ためにはどういったことが大切か、北上市自立支援協議会の川村護会長に聞きました。



「あなたをもっと知りたい」が互いを理解することにつながり、幸せにつながっていく

北上市自立支援協議会 会長
川村 護（まもる） さん

合理的配慮とは

平成28年施行の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」により、障がいのある人への「合理的配慮」などが求められています。

「合理的配慮」とは、障がいのある人に対し、自分たちの負担がない範囲で対応することをいいます。例えば、車椅子の人が段差があって目的地に行けないとき、スロープを案内するだけでもその人は目的地に行くことができます。これも合理的配慮です。すぐに何か提供できるような、障がいのある人たちが活動できるように、スタートラインに着くための調整です。

その人に合った支援を

地域で暮らす障がいのある皆さんは、普通に生活をしたい、社会参加や社会活動をしたいと思っています。「普通に暮らしたい」と願う皆さんが、何らかの支援によってもっと気軽に参加できるのであれば、地域の皆さんはそのことを理解し、共感することが大事です。障がいはあっても、一人の人間。だからこそ、接し方は人によって違います。本人やその周りの人に「私が気を付けるべきところは何ですか」と聞いてあげるのが一番大切なポイントです。そして、本人の困りごとを共有し、その人に合った支援を提供できれば、皆さんと一緒に社会参加や社会活動をすることができます。

少しの配慮で広がる行動

福祉支援の環境を示した「いわてユニバーサルデザイン電子マップ」があります。登録が増えると、障がいのある人の活動の範囲が大きく広がります。市内の事業所の皆さんには、マップへの掲載登録のご協力をお願いします。また、生活の中で何らかの配慮や支援を必要とする人は「ヘルプマーク」などを記したものを持っていることがあります。そういったマークを見かけたら、外見から分からなくても困っていると気付いてほしいです。

互いの理解が共生社会につながる

共生社会に必要な考えに「非専門家の役割」があります。例えば、小・中学生の教育を充実させるために、専門家に当たる教職員の他に、非専門家である地域の皆さんからの学びがあります。障がい者福祉でも同じことがいえます。地域の皆さんが、障がいのある人の地域生活を支えることができると考えます。

私は、障がいのある人に対しては「あなたをもっと知りたい」という思いで接しています。その人をもっと知れば知るほど、相手も楽になっていくことを経験上確信しています。私たちが普通に暮らしている世界の中で、障がいのある人たちが困っていることがあるのも事実です。障がいのある人たちがなるべく困らないように、自分たちを理解してもらうのが、障がいのある人たちの本当の幸せではないかと思っています。

知ってほしい「いわてユニバーサルデザイン電子マップ」や「ヘルプマーク」

■いわてユニバーサルデザイン電子マップ

障がいのある人や高齢者をはじめ全ての人が安心して気軽に出かけられるよう、車いすやベビーカーなどで利用できる岩手県内の公共施設、商業施設（飲食店、スーパーなど）、宿泊施設などのバリアフリー設備の情報を発信しています。

いわてユニバーサルデザイン電子マップ

■ヘルプマーク

義足や人工関節を使用している人、内部障がいや難病の人、妊娠初期の人など、外見から分からなくても援助や配慮を必要としている人が、そのことを周囲の人に伝えるマークです。



地域で暮らす



一人で暮らす、家族と暮らす、仲間と暮らす――暮らしの形はさまざま。今回はグループホームでの暮らしを紹介します。

グループホーム利用者のスケジュール

- 6:00 起床、着替え
- 朝食 7:00
- 8:00 送迎車で職場へ出発
- 始業 8:30
- 昼食 12:00
  注文したお弁当を食べます。
- 16:30 終業
- 17:15 送迎車で帰宅
- 夕食 18:00
  着替え、掃除、洗濯など
  食後、食器の片付け、お風呂に交代で入ります。
  リビングでの談笑や、自分の部屋で好きなように過ごします。
- 21:00 就寝



利用者の皆さんは、１日の出来事を世話人とも話をしています

利用者の皆さんの暮らしは？

平日は世話人のサポートの下、共同で生活をしています。週末は、映画館での映画鑑賞や買い物など、思い思いに過ごしています。また、家族と過ごす人も。土・日曜日の昼食は自由となっている施設もあり、外食やコンビニなどでの食料の購入を自分で決めています。

Interview
「自分らしく」生活できるようサポート

自立更生会では市内に男性用、女性用のグループホームを運営しています。世話人が朝と夕方に食事やお風呂の準備をしています。また、サポート職員は、利用者の病院の受診や金銭管理を支援したり、日々の生活の相談を受けたりします。

市民の皆さんには、地域で暮らしていけるよう見守ってほしいです。



自立更生会
とばせ園 係長
芳野 千春（ちはる） さん

余暇を楽しむ



スポーツや芸術など、自分らしい時間を楽しんでいる人がたくさんいます。その中で、全国大会に出場した人の活動を紹介します。

第25回全国障害者スポーツ大会 フライングディスク競技で１位

障がいのある人とその親の会である「北上市手をつなぐ育成会」に所属している高橋智樹さんは、第25回全国障害者スポーツ大会でフライングディスク競技、アキュラシー（５m離れた内径91.5cmのゴールに向かってディスクを投げ、通過回数を競う）ディスリート・ファイブで１位、ディスタンス（ディスクの飛行距離を競う）メンズ・スタンディングで３位に輝きました。

高橋さんは月に１回、同会の練習に参加。仲間たちと切磋琢磨（せっさたくま）しながら競技力を高めています。

Interview
また全国大会に出場したい

フライングディスクは同僚に誘われて平成24年から始めました。違う職場の人とも交流があり、楽しく練習しています。

フライングディスクの面白いところは、ゴールにディスクを入れるところです。ディスクを投げるときは、焦らないことが重要だと思います。初めて出場した全国大会は厳しい試合でしたが、メダルを取れてうれしかったです。

これからも練習を続けて、また全国大会に出場したいです。



高橋 智樹（ともき） さん

成長した姿に感動

智樹はフライングディスクをするようになってから明るくなりました。さまざまな人とコミュニケーションが取れるようになり、うれしく思っています。



母 眞由子（まゆこ） さん

会員同士の交流に一役

フライングディスクは会員の楽しみとしてスタートし、今では生活の一部になっています。互いに協力しながら練習に取り組む姿は頼もしいです。



北上市手をつなぐ育成会
小原 聖子（せいこ） さん　菅原 徳子（とくこ） さん